

# 歪な楽園

～偏愛と嫉妬～



私が初めてネクロフィリアという言葉を知ったのは、随分昔に読んだE・フロム著の「悪について」だったと思う。

本の中では、“命のないものに熱烈な愛情や関心や執着を示す”という触れ方だったと記憶している。

改めて調べなおしてみると、ネクロフィリアがもっと異なる言葉で使われていたので少々驚いた。

私の中では、ネクロフィリアは“死体への強すぎる執着や関心”という位置づけだったので、“死体と性的要素が深く結びついているもの”でもあるとは、全く気付いていなかった。

父親は誰が会っても奇妙な印象を持たれる人間だった。

実際に私が彼から繰り返し聞いた話は、おかしなものがあまりに多かった。

仕事に行きたくない、という理由で一升瓶の醤油を一気飲みした人は非常に珍しい。

父親が若い頃のエピソードの一つだ。

その日は会社に行きたくなくて、故意の体調不良を試みたらしい。

それが一升瓶の醤油を一気飲みすることだったのだそうだ。

飲み干し終わった後、呼吸もままならない程の苦しさに病院を受診したという。

原因を聞いて、診察した医者もさぞ驚いただろう。

その後も同じ理由で、今度は食酢を一瓶、一気飲みして昏倒し病院に運ばれたと聞いている。

食酢に関しては、“知人女性”の話にすり替えていたが、嘘をついているのはすぐに解った。

一気飲みしたのは父親本人だ。

本人が言うまでもなく、激しいむせこみで呼吸困難に陥ったことは容易に想像がつく。

彼の少年時代の話には、奇行の他、動物にしろ、人にしろ暴力と妙な死が目につく。

その中でも二人の少女を巡る話と父親の少年時代の奇行の一つにはいくつか共通点がある。

私の幼少時代に父親が行った説明困難な出来事との関連性もありそうだ。

記憶を掘り起こして整理する価値は十分にあると判断し、書き起こしてみることにした。

「絞殺ではなく窒息死なんだ」と、ある女子学生の惨殺事件を興奮して何度も語られたことがある。

父親が熱を込めて語っていた“女子学生猟奇殺人事件”は私が生まれる前のものだ。

ある女子学生（当時15～16歳）が野外トイレで、他殺体で発見された。

口には女子学生の下着（パンツ）が本人の喉の奥まで押し込まれており、死因は窒息死。

犯人は捕まらず、迷宮入りになっているのだという。

父親が興奮して特に熱を帯びて語る箇所は「トイレ」と「自らの下着で窒息死した」の二点だ。

まるで犯人の殺害方法を称えているかの様に聞こえた程だ。

殺害現場をトイレに選んだこと、絞殺や刺殺ではなく被害者自身の下着が喉まで押し込められたことによる窒息死したこと。

父親はこのことに強すぎる関心を示し、子どもだった私に何度も話したことがある。

もう一つは、私から見た父方の伯母、父親から見た姉の話だ。

父親が伯母について語る時の陶醉ぶりはすごかった。

熱弁を振るい、涙ぐみ、手が震えていた。

常日頃、無神論者と公言している父親らしくもなく、何かの熱心な信仰者の様にさえ見えた。

それでも本人は抑制して語っているつもりらしいので、父親の姉（伯母）への思いは尋常ではない深さの様だった。

そんな父親の語り口から、神がかった伯母の思い出話が聞けるのではないかと私は期待していた。

だが特に目立った所はなく、内容はいつも同じだ。

父親が子どもの頃、彼の姉である伯母は、母親代わりになってくれていたという。

私から見た父方の祖母、父親の母にあたる人は、私から見た祖父、夫の暴力の激しさに家を出た。

遠い僻地の温泉街で「客を引きながら暮らしている」「仲居をしながら売春している」という話を聞いたことがある。

暴力が全てを支配している様な父親の家の中で、その伯母（父の姉）の存在は異質な程、慎ましく献身的だったといえる。

末の弟であった父親を、暴力から身を挺して守ってくれていたという。

上品で優しくて清らかで美しい・・・私は実際に伯母の写真を見たことがある。

そこにはおかつぱ頭で、目を引くような特徴のない少女が写っていただけだった。

しかし、私が伯母に忘れ難い記憶を残されたのは、あるエピソードを話す時の父親の目だ。

伯母が15歳で変死しているということを語る時の父親の目は、異様な程に熱がこもるのだ。

この話をする時の父親の熱の入り方は、女子学生殺害事件を語る時と同じ様な色を帯びるのが特徴だ。

表現に当てはまる言葉を探すとすれば、熱の入る父親の目の色は「恍惚」に近いと言っていい。

これ程、熱気と活気をみなぎらせて、瞬きも唾を飲み込むことも忘れて話す姿は忘れ難い。

興奮と高揚が抑えきれないとは、まさにこんなことなのだろうと思う。

昔、もう一人の伯母（父親のもう一人の姉）に、少女時代に変死した伯母のことを聞いたことがある。

内容はうろ覚えだが、大人しい人だったというのは本当らしい。

それ以外は全く口にしない。

普段は物怖じしない伯母が、妹に当たる変死した伯母の話になると口ごもるのも印象を深くした。

そしてもう一つが父親の少年時代の奇行だ。

醤油、食酢の一気に飲みにも共通するような出来事だ。

理由は解らないが、父親は自宅の二階窓から飛び降りたのだと言う。

多分、父親は中学生くらいだったのではないかと記憶している。

飛び降りた場所が柔らかい土の上だったので、怪我はなかった。

ただ、顔面から着地してしまったので、口の中一杯に泥土をめり込ませてしまったのだそうだ。

泥土は頬一杯に入り込み、喉の奥まで詰まっており、呼吸をするのも一苦労だったと言う。

父親は水道まで歩いて行き、指を突っ込んで泥土を掻き出した時の苦しさを語っていた。

私は「何故そんなことをしたの？」と質問してみたが、動機については聞くことができなかった。

とにかく呼吸困難に陥る程、喉に詰まった泥土を掻き出した、という行為に彼は熱弁をふるい続けた。

15～16歳という年齢、窒息状態、呼吸困難状態、トイレ、死。

ここからは、このキーワードをなぞらえた様な父親の私への行動を辿ってゆこうと思う。

\*（下記では省くが、私が3～4歳の頃、父親はオーラルセックスを強要し、首を掴んで浴槽に何度も沈めて意識不明に陥らせたことがある。また、小学生だった私を背後から羽交い絞めにして首を締め上げ、指で性器から出血する程の攻撃を加えたこともある。浴槽に沈められて意識不明になった時は病院を受診している。羽交い絞めの件は、旅行先のことで、当時父親の会社同僚男性が現場を目撃して、衝撃を受けていたことを記憶している。同じ旅行先の川原では、私の背後から父親が私の頭を石で殴りつけたこともある。これは川原で遊んでいた見知らぬ他の子ども達が数名、岩の上から目撃している。）

父親は、私がトイレに入るということに奇妙な執着を見せていた。

彼のこの妙な執着を私が自覚し始めたのは小学3～4年くらいだと思う。

幼少時から私がトイレに行く頃合を見計らい、父親が後から付いてくる。

父親はトイレの個室ドアを開けて、私など存在しないかのように入り込み、ズボンから自分の性器を取り出し始める。

私が便器にまたがって排泄途中でもお構いなしなのだ。（当時は和式トイレ。ドアは背後に設置されていた）

余程、父親は切迫して排尿したいのだろう、と子どもなりの解釈を加えていた。

だから押し入られると、慌てて自分のパンツを引き上げて、謝罪しながら父親の横をすり抜けて個室を出る。

父親は無言で一切私に関心を示さない。

私が退室後の個室で彼が何をしていたのかも解らない。

ただ私を使って何かを踏み切ろうとしていたことだけは、本能的に感じていた。

何かを踏み切られることに、私は恐怖感と危機感を感じていたからだ。

父親のトイレへの押し込みは、日曜祭日で日中の出来事だ。

決まって母親は不在だ。

彼女が入信していた宗教の布教や集会活動に忙しかったからだ。

また母親は、自分の不在時には必ず妹を近隣の家や同級生と遊ばせるようにしていた。

だから私は家の中で父親と二人きりにされることが多かった。

幸いなのは、トイレが隣接した家のすぐ傍だったことだ。

隣の家は自営業者で、家のトイレの真横が作業所になっていた。

トイレの窓と作業所の窓が近く、互いに人影が見えて小さな物音も聞こえる距離にあったのだ。

隣人は日曜祭日でも作業することがあり、曇りガラスにその影が映っていることが多かった。

もしトイレの配置が人目に付かない場所だったら、父親の侵入や行動はもっと頻繁でエスカレートしていただろう。

やがて私の住む古い家を取り壊し、新しい家に建て直すと、トイレの個室にも頑丈な内鍵がかけられるようになった。

今度は洋式で、ドアは便器の前方に設置されていた。

鍵に加えて自分の手でもドアを押さえられる利点があった。

だが父親のトイレへの付きまといは止むことがなかった。

鍵のしまった個室の外側から、ドアノブをガチャガチャ回し続ける。

時には隣家の作業所に居る住人が気にならない程度にドアを叩いたり蹴ったりする。

全て無言で行う。

個室内にこもって排泄している私が、自発的にドアを開けるのを待っているかの様だ。

子どもなのでそこまで理解していたわけではない。

だが、内側から鍵をかけても執拗な押し込みを行おうとする父親に対して、恐怖心を抱いていた。

そこから解放されるには、自分から鍵を開けて父親を入れるしかないのではないのか？と思いつめていた。

自分の意志と無関係に、顔から血の気が引き、時には歯の根が合わず、手足が震えて自分の衣類を引き上げられず手間取った。

排泄もそこそこに、何とか衣服を引き上げて慌ててドアを開けると、やはり父親が目を下に向けたまま仁王立ちしているのだ。

私が「ごめんね。トイレ、今出たから」と、謝っても無言だ。

タイミング悪くトイレを独占してしまったので、父親が不機嫌なのだと解釈していた。

ドアを叩いたり、ドアノブを何度も回すほど、父親は排泄に切迫していたのだと思っていた。

だが、彼が慌てて用足しをする様子もなく、無然と一点を見つめてドアノブを握り締めたまま立っている。

私は声かけを諦めて、半開きで出口を塞いでいる父親の横を苦労してすり抜ける。

恐る恐るたまに振り向くと、やはり父親は同じ姿勢のままトイレの床方面、一点を見つめたまま微動だにしないのだ。

私が個室から出る前に、ズボンを下げようとする父親も恐ろしかったが、何も言わずに無言でドアを塞ぎ続けている姿も不気味だった。

これは私に生理が始まってから気付いたことだ。

幼少時から私の就寝中に、父親が私のパジャマや布団の中に不定期に射精してゆくのは、母親との性行為の途中に、寝室から抜け出て行っていたということだ。

当時、両親は二階に寝ており、私と妹は一階で眠っていた。

別室に寝ている両親の部屋から頻繁に物音がして、深夜に父親が何度もトイレに行く。

その度に母親の「またなの？」と呆れた様子の声が洩れ聞こえてくる。

私の覚えている限り、父親は一晩で少なくとも4~5回は寝室とトイレを往復していたと思う。

何度もトイレに立った後、私の布団を剥いで興奮をかきたてていたらしい。

十分に性行為が可能状態になると母親の待つ寝室に向かっていったのだということが解ってきた。

幼い頃から自分のパジャマやシャツ類に何故、誰が、いつ、どういう状況で射精していたのか？納得した。

私を覚醒させないように、慎重に首に手をかけて行っていたことも多かったと思う。

あるいは鼻や口を押さえたのかも知れない。

うつらうつらしながらも、独特の締め付ける寝苦しさ息苦しさ、父親が耳元で囁く様に、甘ったるい、あやう様な話しかけを覚えている。

そんな状態の中、私は睡眠中に大量の失禁をしたことがある。

小学生になっていたし、おねしょをする年齢ではなかった。

その時、父親が「小便たれやがって！」と、甘ったるい口調から罵声に転じたことがあった。

目は覚めていたが、絶対に目は開けず、起きていることを悟られまいと息を殺していたのを覚えている。

”お漏らし”の罰として、母親に何日も失禁したままの布団とシーツで眠ることを強要された。

洗濯したシーツに取り替えてもらえたのは、母親が入信していた宗教団体の私と同学年だった女の子が家に泊まりに来た為だ。

この子の宿泊がなかったら、私はもっと長いこと尿汚染の布団に毎晩寝なければならなかっただろう。

父親の深夜の奇妙な習慣に気付いた母親は、夫婦の寝室と子ども部屋とトイレを往復されたのでは効率が悪いと判断したのだと思う。

あるいは、私だけではなく隣では母親の大事な子どもである妹も眠っているのだ。

私が父親の興奮材料に使用されるのはかまわないが、妹は守らなければならない。

彼女の中では、妹は自分の子ども、母方の家の子ども。私は”父親の子ども”という区別をつけていたからだ。

私を父親に差し出す代わりに、母親は頑として妹を守り続けていた。

いつもの様に私が寝付いた頃を見計らい、両親は夫婦の寝室に私を運び込んで無駄な往復を省く試みに出た。

私はまだ小学生だったので、母親でも軽々と抱き上げて階段を上ることができた。

就寝時は姉妹二人で別室に眠っていたのに、翌朝は私だけ両親の部屋で目を覚ます日が始まった。

何故こんな移動を繰り返されるのか、子どもの私には解らなかった。

だが、就寝時の部屋で目覚められず、両親の寝室で目を覚ます朝は、いつも身体的な不快感と不調を伴っていた。

吐き気、頭痛、眩暈、体の節々が痛み、特に両膝間接と股関節は強く固定され続けていた後の様な痛さを何日も感じる。

あまりの痛さに、接骨院に行ったこともあるが、痛みの原因は不明だった。

移動は主に週末に行われることが多かった。

大抵、私は睡魔に勝てずに、翌朝、夫婦の寝室で吐き気と共に目を覚ますことになる。

しかし稀に移動中や移動後に覚醒する時もあった。

そんな時は薄暗がりの中の両親に向かって「何で私がここにいるの？何をしてるの？」と質問したことがある。

両親のどちらの拳か解らないが、思い切り頭を張り倒された。

筆筒か鏡台に叩きつけられて、私は意識を失ったのではないかと思う。

翌朝、痛む頭と共に起床した。

前頭部や側頭部にコブを作っていて、寝返りを打った時にその痛みで目を覚ましたのだ。

あまりの痛さに母親に訴えると、「寝ぼけて筆筒にでもぶつけたのだろう」と言われ、自業自得だと罵られた。

排泄に加えて、睡眠も安全にとることが難しい状態は耐え難かった。

外傷がないので外側からは見えないし、私自身にも自覚や知識がなく、誰にも何処にも訴えようがないのだ。

学校での人間関係は崩壊寸前で、エスカレートするクラスのイジメも加わり、私は完全に逃げ場を失っていた。

寡黙なくせに場違いな所で、泣いたり笑ったりする様になっていた。

いつの間にか、父親による私のトイレへの付きまといは無くなっていった。

夫婦の寝室への移動も、私が中学に上がる頃には無くなっていった。

だが私の状態はますますひどくなっていった。

父親の性虐待は、本格的な性行為を前提に形を成しつつあったからだ。

私は学校生活だけではなく、日常の細々したことも、こなせないことが増えていった。

身だしなみを整えられない、鏡が見られない、コミュニケーションがとりにくい、集団行動が一切できない、時間割を認識できず、必要な教科書を揃えることさえ困難になっていた。

冗談の様に聞こえるかも知れないが、すぐに思い出すとはいえ、食べ方を忘れてしまったり、衣類の着脱で混乱し戸惑うこともあった。

自分の不具合をどんなに隠しても、普通学級での継続が難しいのではないかと嫌でも教師達に問題視される子どもになっていた。

私が義務教育終了を迎える頃、父親から奇妙な宣告を受けた。

15歳になったので、これからは私を子ども扱いはしない、一人の人間として見ていくことにすると言うのだ。

“ちゃん付け”や愛称での呼び名は一切しない。私の名前は呼び捨てにすると言い出した。

父親はそれが私への大人扱いなのだと言う。

私は外国映画の中の様に、いわゆるティーンエイジャー扱いにすることか？と解釈した。

しかし、話をよく聞くと内容はやはり妙なものだった。

父親にとって、私を「一人の人間」として、向き合うということは、キャバレーやストリップ劇場に父親同伴で赴き、そこで風俗店の接客マナー、給仕、サービスの提供の技を見ろというものだった。

要約するとそういうことなのだが、私はかなり首を傾げていた。

何故なら、話が恐ろしい程遠回りするからだ。

場末のキャバレーではない高級キャバレーがいかに洗練されているか。

一流ストリップが芸術や神業の域に達したものの凄さを力強く語っていたからだ。

ストリップ嬢の中には、膣にバナナなどを挿入し、膣の筋力？だけでバナナを折る技があるので見るべきだと言う。

一級クラスの風俗に関わる女性達は、皆から一目置かれ、敬意を払われるというのだ。

父親があちこちに段取りをつけて、私を連れて回ると言い出したのだ。

母親も、私の様な学校に順応できない子どもでも、世の中は10代というだけで価値があると言っていた。

また、そうした場所の男性達（客）ならば、私にとっても安全だと両親は言っていた。

外の誰とも解らない男性達は、私を集団で公衆便所扱いするだろうと警告していた。

両親から見た「誰でも使用できる公衆便所」である私は、外の男性達もそういう扱いをすると言うのだ。

病気を感染させられ、何度も妊娠を余儀なくされ、場末から場末を渡り歩くしかないだろうと警告していた。

若くて値打ちのある頃はいいが、年齢を重ねればもっと惨めになるだろう、とも言っていた。

子どもだった父親を見捨てて、家を出て行った父親の母、私から見た父方の祖母の様に。

私にはそれ以外の評価を異性から受けることはないのだから、と戒めていた。

しかも、外の男性達は、平気で一度に10人20人の男性の相手を私に強要するはず。戒めが聞けないなら覚悟をしておけ、とも言ってきた。

そういう私の行く末が解っているから、自分の意志で外に異性を求めるのは危険だと言うのだ。

両親は私の異性との接触を固く強く禁止した。

だが、これが実現することはなかった。

何故なら、私があっさり学校の同級生や教師達に話したからだ。

また、性虐待について、不完全ながらも私が学校教員や同級生達に暴露したのもこの頃だ。

両親が考えているより、私の頭はずっとクリアだったのだ。

私が高校進学後に知ったことだが、母方の叔父や祖母などの親戚も、私の水商売従事に関しては本気で検討していたらしい。

両親は母方の親類から借金を重ねており、街金の借金清算でも彼らにかなり迷惑をかけていた。

（母方の親類は、父親がだらしない為の借金で、全て彼の責任であると考えていた。自分達はその尻拭いをさせられたと思いついでいた。“父親の子”である私にも当然、責任があるというのが主張だ。）

有能な妹の進学や将来の為にも、無能な厄介者の姉である私が穴埋めするべきだと考えていたらしい。

親類の集まりでも、皆と一緒にご飯を食べさせてもらえない扱いを受けたことのある私だ。

父親の手垢がついた使い古された公衆便所でも、10代で幼ければ多少の値は付くだろう、という皮算用もあったろう。

叔父は、異性相手の仕事ばかりではなく、同性愛者であれば同性相手の仕事もあるだろう、と仄めかしていた。

母方の親戚にとって、あらゆる面で世間体を悪くする私は存在そのものが汚点だった。

ところが、私は高校進学を果たした上に、卒業後は実家を飛び出して一人暮らしを始め、転職を繰り返した。

人間関係を築くことが困難な為の転職だったが、親類夫婦は私と顔を合わせるたびに侮蔑や嫌味を投げつけた。



私は一人暮らしをきっかけに、おっかなびっくりだが異性と付き合う様になった。  
初めて異性と付き合った私に、父親が投げつけた言葉は「売女、公衆便所、安売り」などだった。  
下卑た言葉で私が父親から殴られたり蹴られたりする様を、母親は笑って見ていた。  
どんなに時間がかかってもいい、必ずこの人達から完全に逃げ切ってみせる。  
惨めさと痛みをかみ締めて、強く決心したのを私は今もよく覚えている。

精神の異常、病気、障害といった境界線を、どこから引くのか私には解らない。  
比較的、社会や人間関係に折り合いを上手くつけていた母親や母方の親類達は、異常、障害、精神病というラベルは貼られないのだろう。  
強いて言えば、どこにでもいる普通の健康的な人々となるのだろう。  
夫婦の性生活の興奮材料に子どもを活用しようが、借金清算の為に子どもを風俗仕事に従事させようとする人達でも健康なのだ。  
だが父親に関しては、直接的な虐待、性虐待以外にも何か異様なものを感じる。  
その”何か”は言葉で表すのが難しいのだが、「人間味」が全く感じられないという表現が一番、近いかもしれない。  
もし感情に温度や質感や手触りがあるとしたら、湿っていたり乾いていたたり温かかったり冷たかったり、何かしら手に感触があるのだろう。  
でも父親から感じ取れるのは、砂漠の砂の感触だけで、一切の温度や異なった質感があまり感じられないのだ。  
唯一、熱を感じるとしたら、それは女子学生猟奇殺人と変死した伯母の話などだ。  
その熱は一種独特で、他のどれとも異なる温度がある。  
私はそう感じている。  
同時にそれは感情が薄い私の中にも強い感覚を引き起こすものだ。

少し前に、遅ればせながら映画『私の男』を鑑賞した。  
原作は随分前に読んでいたので、話の粗筋は知っていた。  
だから衝撃度も薄かったのかも知れない。  
幻想的で美しい映画という印象が強い。  
シアターのミーティングでもそんな旨の感想を述べた記憶がある。  
『私の男』の原作の中にその台詞があったかどうかさえ覚えていないのだが、  
映画では主人公の女子中学生が、「あれ（主人公と暮らす父親）は私の物だ！」という様な台詞を、流氷の海で叫ぶシーンがある。  
また、主人公よりも年上の父親の恋人に、これ見よがしに父親との馴れ合いを主張して、恋人に不穏な気持ちを起こさせる。  
全編を通して、ここまで父親を支配できたなら、十分に満たされて気分がいいだろうな、と思った。  
個人的に、この映画が美しい仕上がりになっていたのは、母親や他の姉妹兄弟が絡んでこなかったからかも知れないと思った。

もし、一つ屋根の下に父親と娘以外の人間が存在していたなら、話はもっと泥沼化していたのではないかな、と考えた。

限られた空間の中にある父娘二人だけの楽園にも見えた。

映画の中の二人は、とても楽しそうで幸せそうに見えた。

私の家に、そんなものはなかった・・・・・・私は映画の中の父娘に嫉妬していた。

冒頭に書いた二つのエピソード。

女子学生の猟奇殺人と15歳で変死した伯母。

この二人の話聞いた時、私が強烈に感じ続けていたのは、ものすごい嫉妬だ。

自分の中の感情を強く掻き立てるから、父親にこの話をねだったり、飽きもせずに繰り返し聞いていたのだ。彼が恍惚とするのを見るのも面白かった。

話を促すことで、私が聞き手に回ることで、父親を良い気分らせてやっているという自負と満足感もあったからだ。

自分の中の理屈ではない強い感情と父親の満足を、対話という形にしていたのだと思う。

だけど父親の頭と精神を占めているのは、遠い過去に死んだ二人の少女なのだ。

私じゃない。

どれ程、対話を重ねても、父親の中からこの二人の少女を完全に閉め出すことができない。

母親など目ではない。父親の関心を母親から引き離すのは容易いことだった。

不快極まりない父親のベタつきや勘違いも、母親が私に悔しがり嫉妬する様子を見ることで我慢できた。

だが死人のくせに、父親の中の記憶に存在し続ける二人の少女達は、どうしても引き剥がすことができないのだ。

もし父親の脳や内臓や血の一滴までも引きずり出して、細胞にまで染み込んだ二人の少女を完全に切り取ることができるなら私は迷わずにそうしていたと思う。

そして、父親から切り出して肉片化した二人の少女に向かってこう言っただろう。

『私の男』の主人公が流氷の海で叫んでいたのと同じ様な台詞を私も口にしたらろう。

「あなた達なんか関係ない！あなた達だけが楽園にいるのを許さない！これは私のモノだ！私の全てだ！」と。

どれ程の年月が経っても、父親の私への性虐待や言動は、この二人の亡き少女達に被せた父親の幻想や妄想なのだ。

父親にとって私は、一度も会ったことがない少女達二人の亡霊の代替品でしかない。

そこに考えが至ると、父親の妄想の代替品という自分の存在の安っぽさに、思わず苦笑した。

現在も、薄いながら湧いてくる私の感情は、どれも砂の様にサラサラしている。

水が染みることはあっても、砂の量が多すぎてすぐに乾いてしまう現象に似ている。

欠落しているものを嘆いても仕方がない。

欠落していない部分を補強しながら、私は進んで行くしかないのだ。

こうして言葉に起こすのも、シアブに参加しているのも、自分なりに進んでいることなのだ。

私の中に父親と似ている部分や引き継いだものはあっても、彼とは違う。

私は生きている人間に失望したりしない。

死体に愛着をもったりもしない。

死んだものはただの活動停止した細胞の塊だ。

ぶよぶよした石ころと同じだ。

私の執着心が別の所に別の形で存在していても、誰かに大きな犠牲を強いて代替品になどしたくない。

健全ではない私の偏愛も、別の形で自分自身にも、社会や人にも役立ち利益になる様に進めるべきなのだ。

父親の中から二人の亡き少女を切り取り排除することが出来ない様に、私の中の父親への偏愛も切り取り排除することは出来ない。

私は生きた人間を死体代わりにして、自分の世界観を現実化させようとしたり、子どもに屍姦をなぞらえる様なネクロフィリアの父親とは違う。

私が屍に嫉妬することは、多分、もう二度とない。